

# 越境による学びの場としての産学共同プロジェクト

三代純平（武蔵野美術大学）

言語文化教育研究会第70回例会

「場」を問い直す「場」—研究と実践の蓄積と体系化を目指して

2020.11.7.

# 発表の概要

1. 私にとって「場」とは
2. 越境し学び合う場をつくる
3. カシオ計算機と武蔵野美術大学の産学共同プロジェクト
4. 「場」のデザインから考える日本語教育実践

# 1. 私にとって「場」とは

「場」：教育実践を通じて形成される具体的な場所／ことばの交差する空間

教育実践の意味や複雑な「学び」を理解するために視点

三代（2011a）「能力」から「場」へ

ことばの教育の意義やことばの学び、あるいは日本語教室の意味を

「能力」から捉えることへの抵抗

# 1. 私にとって「場」とは

三代（2011b）：「場」としての日本語教室の意味―「話す権利」の保障という意義と課題

三代（2015）：日本語教育という場をデザインする―教師の役割としての実践の共有

―社会で学ぶ 社会と学ぶ 社会が学ぶ そういう社会をつくる場としての日本語教育に関わりたい

―「場」という視点から日本語教育をデザインしてみたい



# 1. 私にとって「場」とは

「場」という視点から日本語教育をデザインする

- 国籍や母語に関わらず、「日本語」でコミュニケーションをとることを学ぶ／コミュニケーションを互いに保障する
- 大学と社会（地域社会、企業、世界等）をつなぐ場とする
- その場では、互いに学び合うこと、新しい価値を創出することをめざす

## 2. 越境し学び合う場をつくる

### 越境

互いにとって異質な文化に触れあうことで、いったん熟達した経験（実践）の層やそれまでのコミュニティのあり方が揺さぶられ（揺さぶりあい）崩れていく過程、すなわち「熟達や既存の枠組みの動揺と破壊」が大なり小なり起こる過程である。そして、そこから新しい振る舞い方やコミュニティ間の関係性を再構築していく過程である。（香川 2015, p.40）

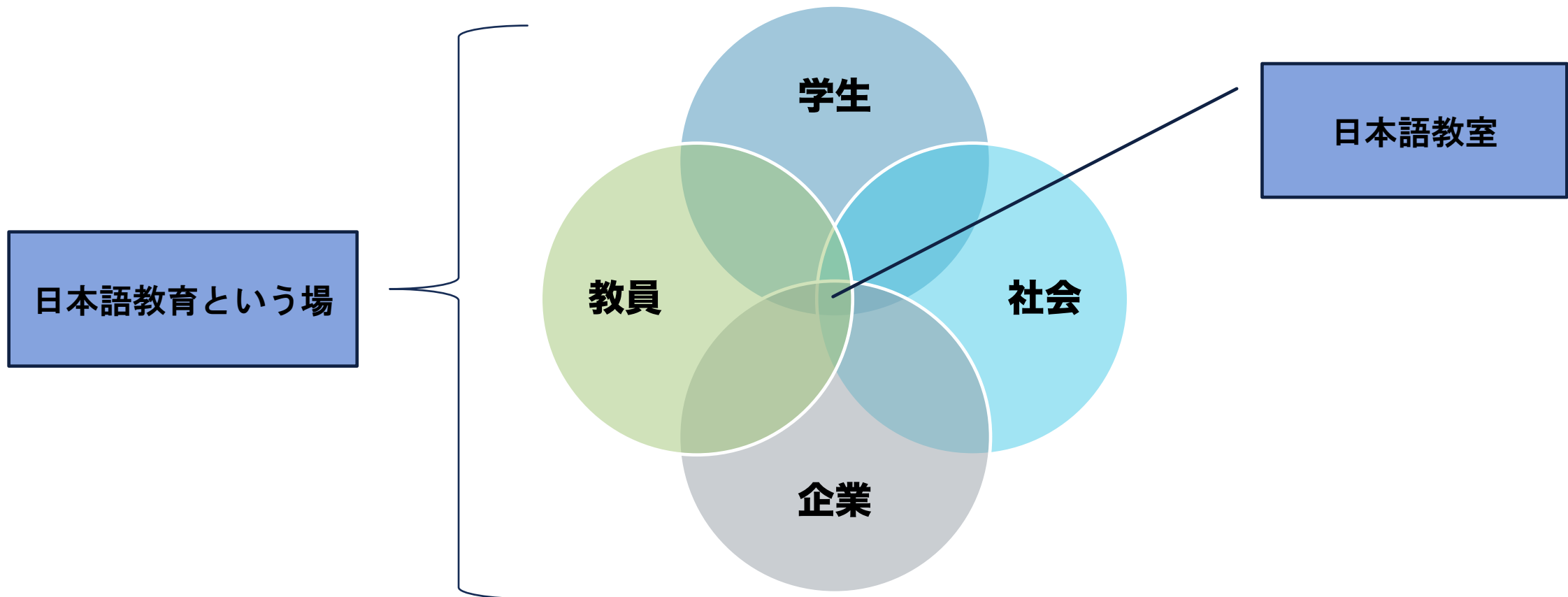
## 2. 越境し学び合う場をつくる

**垂直的学習**：一つのコミュニティの中で熟達するプロセス

**水平的学習**：越境により、新しい価値観を構築していくような学び

グローバル化が進み、社会の価値が流動的な今日、この「水平的学習」がより重要になっているのである。

## 2. 越境し学び合う場をつくる



### 3. カシオ計算機と武蔵野美術大学の産学共同プロジェクト

#### にっぽん多文化共生発信プロジェクト

- ・ カシオ計算機（CASIO）と武蔵野美術大学（MAU）が共同して、多文化化する日本社会で活躍する団体や人を取材する。
- ・ ドキュメンタリー映像を制作し、WEB上で発信する。



# にっぽん多文化共生発信プロジェクト 2018

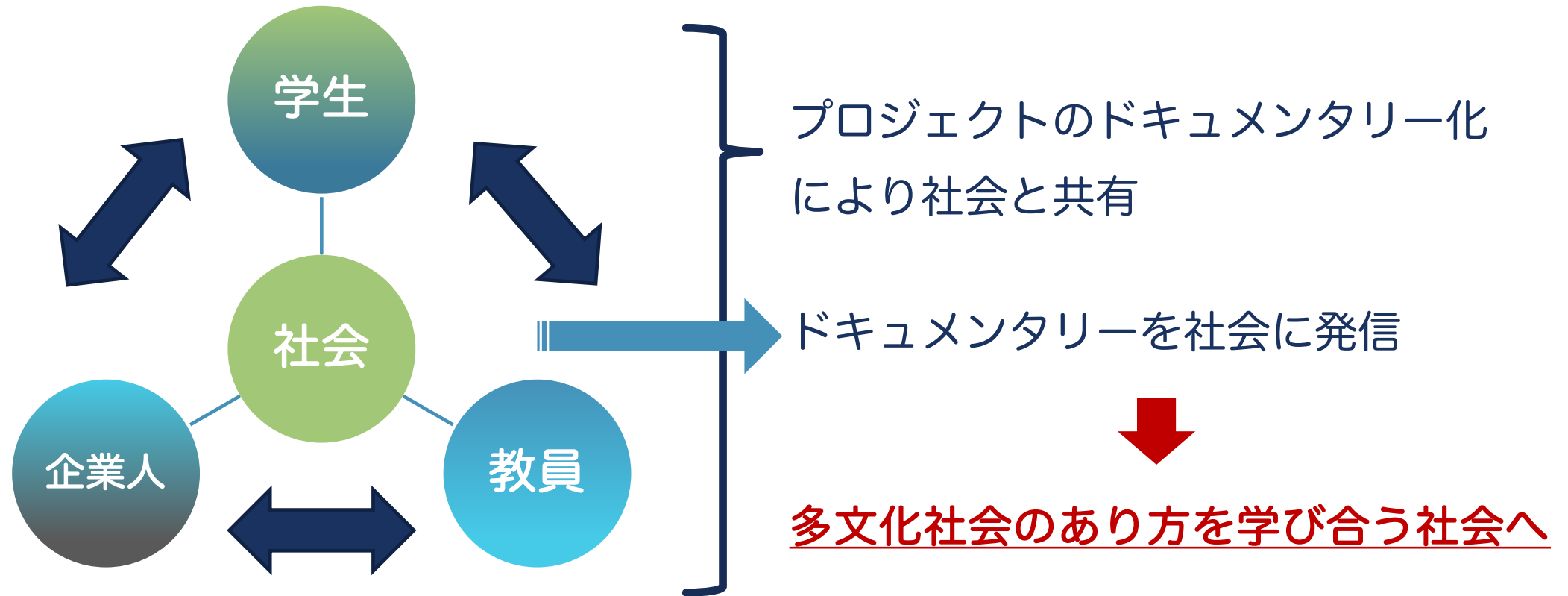
## プロジェクト参加者

- MAU「上級日本語」履修生7名
  - 中国3名、韓国2名、日本2名
- ドキュメンタリー制作ゼミ3名
  - 日本3名
- MAU教員2名
- CASIO社員4名

## プロジェクト目的

- 多様な他者とのコミュニケーションを学ぶ
- 多様な場面でのコミュニケーションを学ぶ
- 多文化化する日本社会の新しい価値を学ぶ
- 社会にメッセージを「伝える」ことを学ぶ

# プロジェクトが作り出す学び合いの場



# プロジェクト概要

週	内容	週	内容
1	オリエンテーション	10	中間プレゼンテーション①
2	キックオフ・ミーティング	11・12	取材・編集
3・4	日本の多文化状況について学ぶ	13	中間プレゼンテーション②
5・6	映像撮影・編集の基礎を学ぶ	課外	編集
7-9	取材・編集	課外	最終プレゼンテーション



## 3・4週目 日本の多文化状況について学ぶ



## 5・6週目 映像撮影・編集の基礎を学ぶ





# 7-12週目 取材・編集



# 13週目 中間プレゼンテーション





# 課外 最終プレゼンテーション



# プロジェクトを通じた学び合い：学生①

## 実社会でのコミュニケーション

- ・今迄の日本語の学ぶは本から得る知識が多いがこの授業ではそうでもない。授業の中に違う専門の日本人とグループを組み、先生や企業の方と話しながら映像の作りが進んでいた。この中の人とのコミュニケーションはすべて日本語である。授業中に学んだのはいわゆるな「日本語」ではない、より本質である日本人とのコミュニケーションを学んだと思う。（中国人留学生）
- ・人のニーズをちゃんと理解し、その合意点に辿る段階も難しいことが今回の取材で分かった。これから日本社会に入りたくさんの社会の壁にぶつかる身として、いい経験になったと感じた。【中略】日本の社会の現実や社会に対する姿勢などちゃんと世の中を勉強した感じがしてよかったと思う。この授業で学んだ経験をこれからも応用していくべきだと思える、意味のある時間を過ごすことができた。（韓国人留学生）

## プロジェクトを通じた学び合い：学生②

### 多文化社会を生きるということ

- ・多文化共生とは今のグローバル社会で一つの国は単にこの国の人に住むではなく、その社会で色々な文化や歴史があって、この場所でそれぞれの国の人々が共生しています。【中略】もちろん留学生としての私たちはその多文化共生であり、自身と関係があって、授業を受けている、日本の方も何人が居て、その教室みんな同じ授業を取って、一つの空間にいることも多文化の大切な証拠でもあります。（中国人留学生）
- ・実際、取材や授業の中で私自身も多文化共生できているのかもしれないと感じている。【中略】生まれや育ちの環境はお互い違うのだが、それぞれの得意なことで分担しあってドキュメンタリーを制作をしている。これが、平澤先生のいういつのまにかある多文化共生なのかもしれない。（日本人学生）

# プロジェクトを通じた学び合い：CASIO社員

## 日本語学習について

- ・ 留学生の学習プロセスを間近に見られたことは、学習機器の開発において参考になった。
- ・ 本プロジェクト自体が新しい言語学習の形として興味深い。

## 多文化共生について

- ・ 取材先で、いろいろな取り組みをみることでき、多文化社会について理解が深まった。
- ・ 学生たちのグループワークに参加することで、自分も少しだが多文化共生を実践することができた。



# プロジェクトを通じた学び合い：MAU教員

## 米徳（映像専門）

- ・ 留学生とのコミュニケーションを、あるリアリティをもって体験したことは、留学生が増加するなか、専門の指導にも活かせる。

## 三代（日本語教育専門）

- ・ 美大の日本語教育を考える上で、企業、教員、学生のものづくりへの姿勢をみる事ができた。

## 4. 「場」のデザインから考える日本語教育実践

- 産学共同によるプロジェクト型の日本語教育は、新しい学び合う共同体の創造に寄与することが期待される。
- 「場」という視点から教育のデザインを考えることは、日本語教育と社会とのつながりを考えることであり、日本語教育からどのような社会をつくっていくかを考えることである。

## 参考資料

- プロジェクトにより制作した作品とプロジェクト全体の記録は、WEB公開されています。<https://web.casio.jp/mau/>
- 2021年早春、プロジェクト3年間の記録が書籍化されます。  
三代純平・米徳信一（編）『産学連携でつくる多文化共生—カシオとムサビがデザインする日本語教育』くろしお出版.

## 参考文献

- 香川秀太 (2015) . 「越境的な対話と学び」とは何か—プロセス, 実践方法, 理論, 香川秀太・青山征彦 (編) 『越境する対話と学び—異質な人・組織・コミュニティをつなぐ』 (pp.35-64) 新曜社.
- 三代純平 (2011a) . 日本語能力から「場」の議論へ—留学生のライフストーリー研究から—『早稲田日本語教育学』9号, 早稲田大学大学院日本語教育研究科, pp.67-72
- 三代純平 (201b) . 「場」としての日本語教室の意味—「話す権利」の保障という意義と課題, 細川英雄 (編) 『言語教育とアイデンティティ—ことばの教育実践とその可能性』春風社, pp.75-97
- 三代純平 (2015) . 日本語教育という場をデザインする—教師の役割としての実践の共有『言語文化教育研究』13, 27-49.